

令和5年度 教職実践研究交流会 2023年7月29日

本年度は、5分科会に分かれて現院生が研究についての中間発表を行いました。多くの修了生、教育学部教員、元教職大学院担当教員の参加があり、多くの質問やアドバイスをいただきました。その後の全体会では、「香川大学教職大学院と善通寺市との連携における取組」と題して語り合いが行われました。また、修了生と現院生との交流会も行われ、温かな雰囲気の中、交流を深めることができました。



各コースで、特色ある実習に取り組んでいます

教職大学院では、3つのコースの特色に応じた実習を行っています。毎週の置籍校・連携協力校・附属校での実習や、様々な関係機関での実習が行われています。実習に参加した現職教職員院生の声を紹介します。

一步を踏み出すこと

学校力開発コース：谷口 雄英

探究実習では、県教委や市町教委等の訪問を通して、教育行政の立場から県全体の教育課題や教育に対する想いを知りました。附属の各校種では、子どもたちの純粋な笑顔や学びに取り組む真剣な姿などから「学校の良さ」を再認識し、さらに教育に対する教職員の想いも知る機会を得ました。事務職員としてただ勤務するだけでは、知ることができなかった様々なことを知ることができ、自分の職業観を改めて考えるきっかけになりました。人は、出会いや経験を積む中で成長します。そのためには、きっかけとなる一步を自分から踏み出さないとはいけません。今後も、一步を踏み出すことで自分の成長に繋げていきたいと思えます。

実習を通しての学び

授業力開発コース：石原 直人

前期実習では、週に1度置籍校に行き、自己や置籍校の課題を分析し、課題解決に向けた取組を検討し、実践してきました。その過程で、授業の中で得た専門的な知識を実践に取り入れることで、実践的能力として自分の身になっていると実感しています。さらに、課題解決に向けて校内研修を行い、先生方から多くの意見をいただき有意義な時間となりました。

また探究実習では、附属小学校へ2週間行き、教育実習生と関わらせていただきました。実習生の授業づくり等に関わり、実習生の主体性を促すにはどのような関わり方がよいのかについて考えました。これは教員同士の関わり方にも通じることで、お互いに高め合える教師集団を構築できる関わり方を今後考えていきたいと思えます。

探究実習での学び

特別支援力開発コース：船橋 奈生子

高松市内の放課後児童デイサービス、通級指導教室、かがわ総合リハビリテーションセンターの実習では、発達障害児への療育や自立活動を主とした個別指導、相談等の概要や課題について学びました。どの施設でも高い専門性に基づく療育や対応がなされており、中でも就学前の子どもや保護者にとって大変貴重な、小学校入学という大きな節目を迎える時期の療育を陪席させていただいたことは得難い経験でした。インクルーシブ教育システムの構築に向けて、今後は学校により確かな専門性が求められていることを改めて考えました。次年度以降、実習で得られた学びとつながりを活かして、各専門領域の関係機関と連携した指導に取り組んでいきたいです。



イシャンゴの骨、ナイルの氾濫による測量など、人類と数学の発展は共にあったことから、学校数学とは歴史を学んでいることに気づかされる。前衛的で誰も思いつかなかったアイデアにより数学が発展した当時の様子を想像すれば、「巨人の肩

の上に立っている」というニュートンの言葉を出すまでもなく、先人の不明瞭な事態に向き合い続けた苦悩や閃きによって、今日が成り立っていることに思いが及ぶ。学校教育では、そのような情緒的側面にどれだけ迫っていくことができているであろうか。

その一方で、効率的・即時的に知識を獲得することや解決を導くことを教育理念とする立場もある。算数・数学の授業には必ず本時のめあてや学習課題を提示する。次に課題が解決されるための方法的な見通しや既知のアイデアを思い起こさせる。授業の最後にはしっかりと本時の成果がまとめられ、振り返りから次への学びに繋げていく。私自身も研究上の関心とは裏腹に、公開された研究授業の参観や学生の模擬授業にコメントを頼まれた際は、こうした観点をポイントとして、よい授業のためには知識の定着を図ることができる工夫がなされているかどうかを視点としている。

正しいことを正確に効率よく指導しようというスタンスに対して、学習のプロセスを重視しようとする研究上の関心が、数学教育においては展開している。例えば、数学を不完全で誤りを含んでいるということをも前提とする可謬主義と呼ばれるラカトシュ（1976/1980）の科学哲学的な立場がある。これを基盤として、誤りを修正する過程において、新たな発見が導かれていく創造的な経験の教育的意義が評価されている。

今日では、誤りを見直すプロセスだけでなく、そもそも不明確・不明瞭な状況を前向きに捉える、「性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることのできる能力」（帚木、2017）が新たな教育的な理念として注目されている。

インターネットの普及に始まり、対話型の生成的人工知能まで登場し、安易に様々な回答が得られる環境は充実していくようになった。デジタルネイティブな子どもたちは、AIが解決できる問題はすぐに任せて処理することができるであろうし、固定概念がないだけに柔軟に対応できるのかもしれない。AIを活用することで可能となる新たな学びとは何かを考えると同時に、何ができないのかを考える必要性に迫られている。数学学習において、効率的な学習のためにわざわざ考えてこなかった疑問や、学術的にはナンセンスでも学習者にとって重要な課題とは何かを見直す機会となってきた。こうした研究課題は、AIの有無に関わらず、教材を深く洞察することに繋がり、児童・生徒を学習の中心とする授業設計に有用であると考えている。

大学院では、最新の教育課題に対する知識や方法を学ぶと同時に、自分なりの研究テーマと向き合って試行錯誤する時間を過ごすこともあると思います。子どもが充実した学びとなる瞬間を演出するため、皆さん自身がしっかりとモヤモヤする経験をする環境としても、大学院での学びは最適なのは。

【文献】

帚木蓬生（2017）ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力、朝日選書。

ラカトシュ、I、（1980）数学的発見の論理：証明と論駁（佐々木力訳）、共立出版（原著出版 1976年）

修了した院生の活躍 理論と実践の往還

「香川大学教育実践総合研究第47号」に掲載された、修了生の論文を紹介します。（香大HPより閲覧可）

近藤広理（平成30年度修了生）、植田和也「教科化後の道徳授業に関する小・中学校教員の意識調査に関する比較」

横山大河（令和4年度修了生）、松島充「個別最適な学びと協働的な学びの一体化を実現する学習モデル—ICT活用による選択・共有を生かした授業の提案—」

松岡布美花（令和3年度修了生）、宮前義和「特別な支援を必要とする児童に対する公立小学校の支援体制を向上させるための実践と聞き取り調査」

岡山県香大派遣教員交流会 発足

岡山県政策課題派遣教員として香川大学教職大学院を修了した院生の交流の機会である「岡山県香大派遣教員交流会（O-K桃太郎会）」が発足しました。

近藤広理氏と表紀子氏（平成30年度修了生）が中心となって、令和5年8月11日に岡山市内で第1回目の交流会が実施され、11名の修了生が参加しました。現院生の研究発表や修了生の近況報告などを通して交流を深めることができました。

大学院入試日程のご案内

B日程

出願期間：2023年10月23日(月)～11月1日(水)
学力試験日：2023年11月18日(土)

C日程

出願期間：2023年12月20日(水)～2024年1月9日(火)
学力試験日：2024年1月20日(土)

大学院入試の日程は、左の通りです。入試の詳細につきましては、「学生募集要項」をご確認ください。学務係で配布しております。

また、ホームページ（右QRコード）でもご案内しておりますので、あわせてご覧ください。

